

あなたこそが日本一の 名女優にして、大女優です！

田

中絹代生誕百年の昨年、もう1年前になるか、篠つく雨の中、私は横須賀線北鎌倉駅に降りた。

踏み切りを渡り、円覚寺の山門をくぐり、まず本堂にお参りをする。左に折れて、右に行き、塔頭の松嶺院を目差す。院の小さな門をくぐり、塀沿いに左に行き、突き当りを直角に右に行く。細い石段があり、この石段を登りきると墓地に出る。まず開高健さんのお墓を見つける。ままの大石をデンと置いた豪快なものである。開高さんの手前を左に5メートルほど行くと、目差す田中絹代さんのお墓がある。大きな楕円型の石の右側に、田中さんのお顔がブロンズでレリーフされている。

雨の道中、私はずっと考えていた。

日本一の女優さんは誰だろうと。候補は3人いる。まず田中さん、次に山田五十鈴さん、そして高峰秀子さんである。大女優と云うのは、私の定義ではピン（主演）が多くなってはならない。大について、このお三方はいずれも遜色がない。次に条件として、名女優でなくてはならない。名女優とは当然演技力である。ベル（五



館内には田中絹代主演作品の数々がパネルで展示されている。

矢野寛治（やの・かんじ）
1948年、大分県中津市生まれ。成蹊大学経済学部卒業。大手広告会社勤務ののち、各紙誌にエッセー、コラム、書評などを執筆。「中洲次郎」も同一人物。著書に『なりきり映画考』（書肆侃侃房）など。

Kinuyo Tanaka



十鈴）さんは、19歳で出演した名作「浪華悲歌」（溝口健二監督）、長谷川一夫を喰うほどの「鶴八鶴次郎」（成瀬巳喜男監督）、おどおどしながらも森繁に執着する「猫と庄造と二人のをんな」（豊田四郎監督）がある。すべて文句なしの巧演である。片やデコ（高峰秀子）さんは、男と女の腐れ縁の名作「浮雲」（成瀬巳喜男監督）、林芙美子の生涯を演じた「放浪記」（同）、若き日の「馬」（山本嘉次郎監督）、困われ女の悲恋を演じた「雁」（豊田四郎監督）、天下の名作「二十四の瞳」（木下恵介監督）がある。すべてに真演である。

さて、田中さんである。23歳で15、6の娘を演じた「伊豆の踊子」（五所平之助監督）、太鼓を重そうに背負った姿は本当に島から来た世間知らずの田舎娘。多くの女優さんでリメイクされたが、見比べれば田中さんが一等賞である。「西鶴一代女」（溝口健二監督）の凄みは唸る。大女優がここまでの汚れ役をやるものか。女が堕ちていく流転の映画であるが、最終老残夜鷹の成りきりは空前にして絶後、ヴィヴィアン・リーが演じた「欲望という名の電車」（エリア・カザン監督）のブランチに優るとも劣らない。「雨月物語」（同）での、死しても夫森雅之の帰りを待ち続け、一夜、亡霊となって夫に尽くす。幽明の際を行きつ戻りつしての静かな演技

田中絹代

Kinuyo Tanaka

「田中絹代ぶんか館」は、下関の贖罪です。～作家・古川薫氏談

文=矢野寛治 撮影=橘野栄二



写真提供＝芸游会

田中絹代(たなか・きぬよ)1909年11月29日、下関市丸山町生まれ。14歳で銀幕デビューを果たし、17歳で主演に抜擢され、77年に67歳で没するまでに約250本の映画に出演。女優としては日本初の映画監督となり、6作品を発表したことも知られる。

芸どころにして文化のまち、下関は数多くの才能を生みだしてきた。

それら偉大な人物たちの足跡をたどり、魅力にふれてみたい。

第1回は名女優の田中絹代さん。2009年の生誕百年を記念して、2010年2月に開館した「田中絹代ぶんか館」で、その人生と作品にふれることができる。

映画通のコラムニスト、矢野寛治さんが同館を訪ね、絹代の墓所がある鎌倉紀行をまじえつつ、絹代へのオマージュを綴る。